

SMFアート縁日 回遊美術館

2009年11月21日～23日 北浦和西口銀座商店街・北浦和公園・埼玉県立近代美術館

昨年度の〈竹のサウンドオブジェ〉を探して楽しいアート散歩(松本秋則さん出展)に続いて、今年度も北浦和西口銀座商店街の協力を得て、商店街と北浦和公園、美術館を回遊しながら身近な場所でアートをお楽しみいただく(回遊美術館)を開催しました。文化庁から本事業の内定をいただいたのが9月中旬で、11月下旬の実施までわずか2ヶ月という慌しいスケジュールでしたが、アーティストのみなさんの心強いご協力に加えて、前回の経験で商店街の方々とつながりもあり、何とか開催にこぎつけました。またガイド・リーフレットを作成し、会期中、各場所で配布するとともに、21・23日には事務局スタッフによるガイドツアーを行いました。広報面での出遅れが懸念されましたが、NHKのテレビ番組「いっと6けん」での紹介などもあり、昨年以上に多くの方々にご来場いただきました。

美術館やギャラリーでの展示とは異なり、雑多なベクトルが幾重にも交差するまち空間で美術作品を展開するには、目的やプロセスを含めて、当

然のことながら異なる手法が必要となります。アーティストにとっても日常空間のただなかで自らの表現を通してまちや人とうまく関わるかを問われる場になるわけですし、商店街の方々にとってもアーティストの新鮮でユニークな視点や活動に触れて意識の枠組みを拡げる機会となります。そのような相互作用によって、リアルな生活空間に新たな創造のエネルギーを導入し、アートの生成する磁場を生み出すことが、この種のプロジェクトの根底に置かれるべきものといえましょう。にぎわいの創出やアートの感性がきらめくまちの創造というのは、その結果としてもたらされるものです。そうした観点からもコミュニケーションをとりながらプロセスを進め、フィードバック



し、継続を図ることがきわめて重要です。

今回は、個別の設置協力店舗と各アーティストが話を交わす機会はありませんでしたが、残念ながら、商店主やアーティストが集まって交流し、協議する場をうまく設定することができませんでした。次の機会には、そのような場作りにも積極的に取り組みたいと思います。

回遊美術館 出品作家・作品紹介

小野養豚ん《暖》

秋の日差しの中、寄り添いながら暖をとる豚のオブジェたち。養豚場に生まれ育った作家の手で作られて、複数の監視ボランティアに飼育されました。どこか人間臭いその姿が見る人を和ませ、喜んで駆け寄り子どもと一緒に記念撮影する人多数。「常設にして欲しい」との声も聞かれました。

【作品:ポリエステル樹脂、インスタレーション／展示:埼玉県立近代美術館前庭、北浦和公園内各所】



古川勝紀《ピカソ七つの謎めぐり》

作家は自称「ピカソマニア」。絵画や焼き物を中心に制作活動していますが、今回はピカソの絵や言葉、映像をもとにしたクイズのボードとオマージュ作品を、商店街の数箇所に配置しました。クイズを声に出して読み、謎解きを楽しむ親子づれや美術愛好家の姿が多く見られました。

【作品:写真パネル、コンパネ、ドローイング、映像、絵画、陶芸／展示:北浦和西口銀座商店街各所(小松屋、横内酒店、川口信用金庫北浦和支店、ほか)】

出店久夫《アリアドネは夢を見る》《無題》

精緻なフォトコラージュ作品は、全てが手作業。提灯形にしたものを八百屋さんの店舗に吊り下げ、青果物との祝祭的共演を計りました。今日ますます混迷を深める世界の迷宮から、我々はどうのようにして抜け出せるか。作品のテーマに共感した店主が、企画協力への並々ならぬ熱意を見せてくださり、一方化粧品店の壁面を飾った巨大パナーは、その迫力から道行く人びとの注目を



集めていました。

【作品:《アリアドネは夢を見る》フォトコラージュ、スクリーン／場所:POLA THE BEAUTY 北浦和店。作品《無題》フォトコラージュ、提灯／場所:グリーンマートHANO】

中津川浩章と「工房集」の仲間たち 《みんなのドリーミングボックス》(木工ワールドを商店に)

6面それぞれに個性豊かなドローイングが施されたボックスと積み木のような木工作品が、商店街のあちこちに夢と彩りを添えました。愛らしさがより目立つよう展示を工夫してくださる店主や、「ここにも、あっちにも!」と指さしながら宝探しのように展示を楽しみ子どもの姿が見られました。

【作品:《みんなのドリーミングボックス》ペインティング、ホワイトキューブボックス。《木工ワールドを商店に》木工／場所:北浦和西口銀座商店街各所、協力店舗】〔「工房集」参加アーティスト:佐々木省伍、西川泰弘、野田夢友、大倉史子、斉藤裕一、横山明子、柴田鋭一、高谷こずえ、白田直紀、大串憲嗣、栗原和秀、鶴岡一義、栗田英二、尾崎翔梧、阿部美幸、渡辺孝雄、田中悠紀、田中啓示、大橋直行、ほか〕



河村陽介+三友周太

《音の伝播-音の箱-光の箱》

薬局店の前に設置したカメラ・オブスクラ(ピンホールカメラ)と糸電話ボックスは、まちの光や音を日常とはひと味違った形で体感する装置。その



不思議さから作品の仕組みを尋ねたり、作家と熱心に会話したりする人が多く見られました。最終日には道行く人を巻き込んでワークショップを行い、商店街にどこか懐かしい糸電話遊びの風景が生まれました。

【作品:糸電話を応用した各種オブジェ／場所:サイトウ薬局向かいグランスイート浦和常盤前、ほか】

吉田富久一(牟田口努、川島茂雄、長谷川千賀子、田中清隆)《自力更生車+α計画》

奈落の底から社会復帰する「自力更生」を作品化した4種類の屋台車。芸術家による自立と社会貢献という視点も含まれています。重いテーマを選びながらも、まちの人に呼びかける作り手たちは表情晴れやか。その場で作品を作ったり、遊んだりできる参加型が好評を博し、商店街や公園に人だかりができました。

【作品:自力更生車によるプロジェクト・ワーク(協力:小鮎正博、天野彩)／場所:サイトウ薬局向かいグランスイート浦和常盤前、埼玉県ときわ職員住宅前ポケットパーク、北浦和公園、ほか】



松本秋則《風を聴く》

公園のひろばに高さ5mの細い竹を20本立て、その先端に4種類のサウンドオブジェを取り付けました。広々とした空の下、吹き渡る秋風がさまざまな音色を奏で、その場にじっと佇み、心地良さそうに耳を澄ます人の姿が見られました。商店街に設置した昨年とはまた趣の異なる、爽やかな展示となりました。

【作品:竹、インスタレーション／場所:北浦和公園彫刻ひろば】



回遊美術館の3日間を振り返って

親しみやすく、商店街の雰囲気に溶け込んだ〈回遊美術館〉の作品たち。その分気づいてもらえない場合もあり、スタッフ一同心がけたのは、道行く人びとに積極的に声をかけ、会話して、見る人と作品との間をつなぐこと。展示箇所の案内や解説をしたり、公園からツアー客を運んだり……。まち中を「回遊」した甲斐あってか、パンフレットを手にした人が続々と商店街を訪れ、好評を得ることができました。

けれども天気と人手に恵まれなかったイベント2日目は、そのような働きかけをいっさい行えず、代わりに協力店店主が、できる範囲で対応くださったそうです。「商売をするのと同じくらい、作品を見てもらうことにも情熱を注いでいただけに、充分に楽しんでいただけないことが心苦しかった」と。こちらの不手際については真摯に受け止め反省しなければなりません。まちの人たちの、昨年を上回る熱意と自発的な行動は、事業継続のひとつの成果といえないでしょうか。

ただ、そういった場面や来場者の反応を、アーティストは直接見聞きする機会に乏しく、「まち中で展開する難しさを知った」との感想も聞かれました。作品や場所の条件以上に、展示をより良く見せるための人の力の重要性を、3日間を通して実感しました。この先、美術館とアーティストとまちとが一緒にアートする仕組みづくりを、もっと充実させていければと考えています。

(小野寺茜 / SMF事務局)